第２回（仮称）新大田区観光振興プラン策定委員会 議事要旨

日　時：平成 30（2018）年９月 21 日（金）13：30～15：30
場　所：大田区産業プラザ　２階東京都交流室
出席者：大下委員長、淺野委員、石坂委員、伊藤委員、河野委員、佐々木委員
　　杉村委員、菅委員、中條委員、平井委員（代理出席：杉下氏）、平江委員
　　※ 五十音順（委員長除く）

１．開会

事務局から、開会が案内された。
また、観光・国際都市部国際都市・多文化共生推進課長が出席する旨が報告された。

２．前回の討議内容について

資料１「第１回（仮称）新大田区観光振興プラン策定委員会　議事要旨」に基づき、前回の討議内容について、事務局から確認が行われた。
また、前回委員会で指摘があった観光振興とシティプロモーションとの区分けについて、事務局から説明が行われた。

（委員長）

- 東京都の観光政策と整合性を図っていく必要があり、そのなかでも災害時の対応に関して検討する必要があることを、前回委員会で話した。そのようななか、関西空港の水没や北海道全域の停電といったニュースが続き、外国人観光客が右往左往する姿も報道されている。
- 前回の議論では、シティプロモーションでは「大田区」を売るが、観光では「大田区」全体を対象に売っても効果がないという話があった。個別のコンテンツを保有する蒲田や大森、羽田、池上といった地域単位で、地域が主体となって観光振興に取り組んでいくことで、ターゲットや手法が見えてくるように思われる。「蒲田＠OTA」とでもして、「大田」全体は、シティプロモーションで担当していただくイメージが良いのではないか。
- 情報発信については、シティプロモーションとの連携を図りつつ実施すると記載する程度にすれば、本委員会では具体的な検討は不要と思われる。ただし、本委員会ではシティプロモーションの材料となるようなコンテンツを検討し、シティプロモーション側に提供する必要があるだろう。

３．事業者等ヒアリングの進捗について

資料２「事業者等ヒアリングの結果概要（中間報告）」に基づき、事業者ヒアリングの進捗状況について、事務局から説明が行われた。

（委員）

- 羽田地域では、20～30 年前から羽田七福いなりめぐりとして、お土産付きのスタンプラリーを実施している。京浜急行電鉄や商店街に協力を仰ぎ、ポスターを貼っていただいている。当初は参加者が少なかったが、今では町内会の協力なども得てにぎわっており、今後の伸びも期待できる。このように、住民が盛り上がれ

ることを探してほしい。

（委員長）

・　品川でも東海七福神めぐりを実施している。過去のイベントには７つの寺にそれぞれの七福神のミニチュアを作っていただき、これらを売るために、しながわ観光協会は七福神を乗せるための船を作成された。この船の売上は、観光協会の収益性の確保に結び付いている。

（委員）

・　池上の七福神に関してはマップを作成しており、イベント開催時でなくても七福神めぐりを楽しめる。このような取組について把握するために、町内会の方にヒアリングしてはどうか。

（委員長）

・　現行プラン策定時に実施した調査の結果から、地域住民の方々は居住地域に対する愛着が強いが、他の地域にはあまり関心がないという結果が出ている。地域の枠組みを超えて人々を巻き込んでいくことは、新プランにおいてメインに据えていかなければいけない点でもある。特徴的な事例があれば、ヒアリングを実施するのも良いと思われる。
・　トランジット客を空港の外へ連れ出すのは難しい。以前、成田空港で調査を行ったところ、滞在時間が半日以上の方やストップオーバーの方は１割程度で、オーストラリアから日本経由で欧米諸国へ行く方だけであった。トランジットの利便性が向上している現在、対象がどれくらいいるのかしっかりとボリュームを把握すべきであろう。
・　大田区は日本の民泊の先進地域と思われているため、適切な対応をとっていかなければ区に悪いイメージがついてしまう。民泊に関しては、観光面でもきちんと対応方策を考えていかなければならない。

４．想定事業等に基づく検討について

資料３「大田区における想定事業等について」に基づき、想定される事業の案について、事務局から説明が行われた。

（委員長）

・　資料３に記載している「区分」は国の観光立国推進基本計画における整理であるが、あくまでも資料の読みやすさ向上のため、事業の並びを整理するために仮に用いたもので、大田区のプランにおいて国の区分を用いるという意味ではない。前回、議論したように、これらの事業を束ねて大田区なりの区分として施策をまとめる予定である。
・　観光庁「訪日外国人旅行者の安全確保のための手引き」（平成 26 年 10 月）では、地域防災計画に外国人旅行者への対応を記載するための指針を示している。また、同時期に観光危機管理計画を作ろうという動きもあり、沖縄県では観光危機管理計画を作り、市町村や民間事業者に対してもひな形を示して計画の作成を求めている。東京都も近いうちに観光危機管理計画を作成する方向になると思われるので、大田区も今後のために、観光危機管理というキーワードを入れておいた方が

良いだろう。

（委員）

・　ツーリズムＥＸＰＯジャパンのジャパン・ツーリズム・アワードにおいて、おおたオープンファクトリー実行委員会の取組が、国内・訪日領域の地域部門で２年連続入賞した。日本が世界に誇るものづくりの技術を実際に体感できる仕組みや、商店街の散策などを取り入れることで、地域全体の活性化へと結びつけている点と町工場の後継者問題が話題として取り上げられる中で、今年は就職活動をテーマに入れたことも評価されたと聞いている。

（委員長）

・　地域づくり表彰は地域の方々にプラスになるので、積極的にＰＲし、協力いただいた方々を含めて盛り上げていただきたい。

（委員）

・　先ほど委員長から、区分や事業はプランに記載しないという説明はあったが、区分の構成要素として疑問のある事業が入っている。
・　ヒアリング結果でも、区の観光の課題として大きな集客観光施設がないことが挙げられていたが、それならば施設をつくる必要があるのか、既存コンテンツを極める必要があるのか等を考え、大田区なりにしっかりと方向性を定めたほうが良い。
・　コンテンツを作る区分があり、情報発信する区分があり、人材育成する区分がある。国の区分に従う必要はない。大田区には大田区が抱える課題があるので、即した区分を作り、それに応じて事業を割り当てるべきである。そうすれば、区分に対する事業の過不足が把握しやすい。

（委員長）

・　そのとおりであり、国の区分にあてはめようとすると、区の事業は結果的に入りきらない。まずは暫定的にでも区分を定めておかないと、矛盾を見つけにくいということもある。これは、前回話した通り、フレームを先に作って落とし込んでいくのか、または、提案された事業をキーワードでまとめ、そこからフレームをつくっていくのか、というところに繋がる。
・　テーマ集中型とするのか、テーマ優先順位型とするのかについて、ここで決める必要はない。テーマごとに実施し、その時にヒットしそうなものを優先的に、効率的に打ち出していくという基本的な原則だけが基本計画に載っていれば良い。あとは毎年あるいは前期、後期で分けた区分けで、事業を実際に進めていく段階でその優先順位などを明らかにしながら行っていく形であれば、整合性が取れ、動きやすい計画になると思う。
・　テーマは移り変わりやすい。今人気のあるものが２年後にもあるとは限らない。京都も、寺社仏閣の見学が主流であった時代から、今は町屋ステイなど京都の生活を体験することが主流となっている。大田にもそのような素材はたくさんあると思うので、売り方を工夫すれば良い。ただ、それを新たに作るという時代ではないと思う。

（事務局）
・　想定事業の中には、委員の方々から協力いただいている事業もあるので、そちらを紹介しながら、次の観光の施策のヒントになるようなものを出していただきたい。

（委員長）
・　それでは、ここで意見・アイディアを出した組織が必ず実施しなければならない、というわけではないということを条件に、各委員から発言いただきたい。

（委員）
・　今年で５回目の空の日フェスティバルは、世界各国からの出展や、日本全国からの参加がある。地域の方々は採算度外視で楽しんでおり、５年経つが疲弊感もない。

（委員）
・　現在、スイーツをテーマにした「京急×おおたスイーツキャンペーン」イベントを展開している。羽田空港や「おおた商い観光展」でスイーツを販売するほか、京急川崎駅のホームでスイーツマルシェを開催したり、日本工学院専門学校の学生がデザインした電車を貸切で走らせたりと、地域と連携したイベントを企画している。スタンプラリーのプレゼント引換所を大田区観光情報センターとすることで、自社の旅客誘致や商店の売上への貢献に加え、大田区観光情報センターおよび区内個人事業主のＰＲにも焦点を当てている。

（委員）
・　水辺の賑わい創出として、ヤマト運輸の羽田クロノゲートや全日空訓練センターなどがある海老取川沿いの水辺を公園にして、桜を植える企画がある。羽田空港跡地に新たに防潮堤ができるので、そこに船着き場をつくれば、観光性が出て賑わいがもたらされるのではないか。船着き場は、今は弁天橋の辺りにある。

（委員）
・　羽田クロノゲートが開発された時に、クロネコヤマトから公園用地を提供していただいており、今後周辺の水辺の整備が進む予定である。

（委員）
・　空の日フェスティバルに合わせ、空港でイベントを開催している。昨年まではカフェコンサートであったが、今年はキッズスペースで親子に楽しんでいただく予定である。
・　今年の東京モノレールまつりでは、初めておおたオープンファクトリーとコラボしての開催を予定している。多くの方にモノレールを整備する技術を知っていただきたいということから、区内の技術関連の方と連携して行うこととなった。

（委員）
・　今年も池上線全線祭りを開催する。大田区、品川区と連携し 15 駅全てでお祭りを行う。また、サッポロビールと連携して、レモンサワーを飲める「乾杯電車」を

運行する。

・　池上に勝海舟のお墓があるので、大田区、品川区、鹿児島県、大田区商店街連合会と連携して、幕末・明治スタンプラリーを実施している。勝井、せご井として、それぞれ洗足池、池上の商店街でオリジナルどんぶりを開発しており、どんぶりを食べてスタンプを集めると豪華な賞品が当たるという取組も行っている。

（委員）

・　空港自体をコンテンツとして、空港利用者以外の方にも楽しんでいただけるよう、常に取り組んでいる。観光地として、新しくコンテンツを作る取組は良いと思う。

（委員）

・　観光振興プランを策定するにあたって、ターゲットを絞ったほうが良い。区として観光の目玉になる施設がない中で、１つの事項に集中してみるのも良いのではないか。

・　各社、各自治会が様々取り組んでいる中で、開催日時や場所を一か所に集めて、皆で取り組んだ方が盛り上がるかもしれない。同じお金や時間で最大限の効果を出すにはどうしたら良いかを考えることも必要である。

（委員長）

・　今の意見は、リーディングプロジェクトを掲げようということかと思う。現行プランではリーディングプロジェクトは掲げておらず、幅広く捉えようということだったが、今回はリーディングプロジェクトを掲げるか、次回以降の委員会の大きなテーマになるので考えていきたいと思う。

（委員）

・　既存のインフラやモノ、地域などを再発掘することで、コンテンツになり得るということを感じている。区外の方から、蒲田の店は怖い、一見さんが入りにくいと言われる。内部にいると分からなくても外部からは面白いというものもある。そういった大田区、蒲田らしいものをうまく活かして関心を呼ぶコンテンツを作る必要があると思う。

・　例えば飲み屋街などの個別具体的な話について、地域内でだけ議論するのではなく、外部からお金を落としてもらえるようなより良いＰＲ方法はないかなどと、この委員会で考えていけたら良いと思う。

（委員長）

・　「コンテンツ」は、資源とターゲットが合わさって初めて出来上がるが、資源のそのもののことをコンテンツと称している場合がある。

・　委員からの意見は、ターゲットと、そのターゲットからはこれまでは連想されていなかった資源とを合わせてコンテンツ化し、どのようにテーマ化していくかをこの場で議論していけば、さらにいろいろなものがマッチングする可能性があるという指摘だったかと思う。これにより、大田区らしいコンテンツの捉え方ができるのではないか。

（委員）

- 商品開発等は商店街を支援しながら行っているが、そこで予算が尽きてしまい、プロモーションまではあまり手が回っていなかった。
- 現在、鉄道事業者の予算を活用させていただくことで、うまくプロモーションできており、近年、商店街のモチベーションも高まってきた。プロモーションについては、観光やシティプロモーション、区内の企業団体等で担っていただけたら、商店街は商品開発に集中できる。役割分担していただけると、予算も集中して投入できるので、検討をお願いしたい。

（委員長）

- 本来であれば、ターゲットを意識してコンテンツを見出して商品化し、その後にプロモーションが出てくる。しかし現在はプロモーションが先行してしまっており、順序が逆になっているという指摘をいただいたように思う。

（委員）

- 一番大きいのは民泊の問題である。現在蒲田エリアでは建設中のホテルが多いが、民泊とホテルとのすみわけがうまくできるか危惧している。バルセロナでは民泊が増えてアパート代が高騰し、民泊に抗議するデモが起きているという話を聞いている。
- インバウンドをどこまで受けるのか。京都や鎌倉のように飽和状態になり、通勤通学客が電車に乗れないというレベルまで受け入れるのだろうか。様々な人を受け入れることで、いろいろと問題も起こる。これは先進事例から学べるのではないか。
- 災害が起きた後やオリンピック後など、宿泊需要が落ちたときの対応策を考える必要がある。
- 先ほど災害対応体制整備事業とあったが、大田区には羽田空港があり、世界中とつながっている。ＳＡＲＳのようなウイルスに対する危機管理対策が必要だと感じる。

（委員長）

- 東京都の審議会では、サイバーテロが議論に挙がった。ペーパーレスの時代になっていることもあり、対応を事前に考える必要がある。

（委員）

- 現行プランは詳細な柱建てが行われている。誘客マーケットの章には「歴史史実とゆかりの人物」という柱が立てられているが、委員長がおっしゃられたように時代は変わっていくと感じる。
- 羽田神社の例大祭では、外国人向けツアーガイドを実施している。３年経ってかなり浸透してきているが、物見遊山ではなく、祭りを実施する背景や地域の想いをうまく翻訳して、伝えなければいけないと感じている。
- 渋沢栄一の田園都市株式会社設立から今年で 100 周年であり、街歩きツアーを行ったところ、通常の４～５倍である約 90 名の応募があり、とても好評だった。周年行事等、地域で脈々と続いているものを紹介した。

（委員）
・　今後の変化を見越して、プランをまとめていくことが大事だという指摘であったように思う。2020 年までとそれ以降のことは、都も区もかなり意識していると思うが、合わせた５年間について、新プランでは示していければと思う。
・　現行プランでは、考え方だけを示すという形を取っている。現在はステージアップしているので全く同じというわけにはいかないが、10 年間取り組んできた成果を踏まえ、今後の区の観光に関する基本原則やヒントは書いても良いかと思う。
・　シティプロモーションの推進体制については議論されているのか。

（事務局）
・　シティプロモーションの推進体制についての議論はまだ行われていない。

（委員長）
・　現行プランについて、この 10 年間の実績評価を考えると、皆さんの協力によって一定の評価を受けるところまできており、これはとても大きな成果である。
・　区と観光関係者間の関係はフラットなまま続いており、これも成果として挙げられる。
・　次のステップとして、誰が舵をとるのかという議論をしていく必要がある。舵取り役は行政ではないと思う。
・　シティプロモーションと連動させられるよう、観光振興プランの推進体制と合わせてシティプロモーションと観光振興プランの推進体制を決める必要がある。

（委員）
・　自身は佐渡島の相川町の生まれであるが、行政が世界遺産登録に向けて動いているものの、住民の盛り上がりに欠けている。後から登録運動を始めた石見銀山は、住民の盛り上がりもあって世界遺産に登録された。
・　祭りを行っても、商店街や住民が知らん顔ではうまくいかない。地域の観光への気運醸成が不可欠である。

（委員長）
・　推進体制には、企業や住民だけでなく、これからの観光を考えると小学校、中学校といった教育機関も入ってくる。学校教育が関係すると話が複雑になるが、生涯学習の一環として考えると関係者の協力を得られやすく、2020 年以降の大きなテーマとなる。
・　観光振興プランは基本的に、2020 年までと、そこからの合わせて５か年で作成する。
・　現行プランとの一貫性を担保しつつ進める。また、プランには原理原則、考え方のみを書いて、具体的な事業内容は、行動計画の中に明記していく。
・　地域ごとの違いを大事にしているところが区の特徴である。地域の観光特性を踏まえ、来訪者の観光行動の特性、地域住民の観光に対する意識、この３つを掛け合わせたプランとしていく。
・　本日の議論をまとめると、１つ目に、観光エリアマネジメント、いわゆる地区単位の観光振興を継続的に進めていき、後はそれをどう組み合わせるかを検討して

いくということ。２つ目に、ターゲットとなり得る来訪者の観光行動を意識して、重点化したプロモーションを実施し、商品づくりを考えていくということ。３つ目に、地域住民のふるさと意識を引き出して、協力をいただきながら観光を盛り上げていくということ。４つ目に、観光危機管理という名前で、安心安全な生活観光都市を実現していくということと整理できる。

・　次回までに、シティプロモーションと観光との違いについて、引き続き明確にしていく必要がある。
・　本日の資料３にある想定事業一覧については、キーワードベースで組みなおし、参考資料として提示いただきたい。
・　次回以降、重点的なテーマを明記するか、リーディングプロジェクトとして示すかどうかは、皆さんにある程度キーワードを出していただいた段階で、改めて議論したい。

５．閉会

事務局から事務連絡が行われ、閉会が宣言された。

以上